

新しい予防教育



山崎 勝之
鳴門教育大学予防教育科
学教育研究センター所長

らった。

解説

鳴門教育大学が昨年度から、子どもの健康や適応を守ることを目的とした新しい「予防教育」の開発・実践に取り組んでいる。同大予防教育科学教育研究センターの山崎勝之所長に、これまでの経緯や成果を解説しても

生活習慣病予備軍やうつ病の急増。子どもの世界は、大人世界の縮図と化している。学校では、いじめ、不登校、校内暴力が横行し、改善は見込めていない。

子どもたちの健康や適応を守る教育を、全ての学校で恒常的に実施できないものか。これは、世界中の予防教育研究者の誰もが、いまだ実現できない喫緊の課題である。予防教育科学教育研究センターは、この課題を達成するために設立され、5年にわたる計画で文部科学省の概算要求事業にも採択された。心身の病氣やいじめなど、学校での適応問題への抜本的対策は予防にある。しかも、誰もが将来的に問題を抱える可能性があると考え、全ての子どもを対象にした「ユニバーサル予防」が必要に

脳科学と心理学の最新データを基に

なる。世界に先駆けたり取り組みが今、鳴門教育大学で始まっている。この教育は、「いのちと友情」の学校予防教育と友情」の学校予防教育（略称「トップ・セルフ」）と呼ばれる。成り立ちが、これまでの学校教育とは異なり、科学的根拠を持つて構築されている。脳科学と心理学の最新の研究データから、教育目標、方法、効果評価法が開発された画期的な教育である。

授業は実に魅力的で楽しい。その上、科学的な教育効果が曖昧さをそぎ落とした数値で提示される。学業面でも効果が期待される。トップ・セルフの授業には型があり、決まった手順で進んでいく。これは、教育が広まる上で必須の要件となる。手順の

れもが子どもを引き付け、教育目標の達成へ向けて連動する。その手順を追ってみよう。最初に授業で目指すことを伝えた後は、アニメーション物語が始まる。音楽と映像、そして夢のようなストーリーが子どもを夢中にさせ、授業への自然な導入となる。その後、小グループで構成された教室では、さまざまな単位で子ども同士の活動が展開される。ここで、子どもの授業への関与度は最高潮に達する。あまり目にはない斬新な教材、効果的なBGM、アイデア満載の活動デザイン。ここがこの教育の真骨頂で、教育目標の達成への大きな手助けとなる。子どもたちは注意をそらさず、われ先にと活

動へ没頭していく。授業も終わりに近づくと、最後のアニメ物語からまとめへ。そして、授業の進行過程を示すパネルの上に、学習のポイントや授業の特徴を記憶させるためのイラストシーンを張り付けて、終わりのあいさつ。この授業を一度でも見た人は、「目からうろこが落ちる教育」だと口をそろえる。過去一年半は、鳴門市を中心とした一般小・中学校と附属小・中学校で開発を兼ねて教育が進められた。そして今、小学3年生から中学1年生まで全160時間の教育の全貌が姿を見せた。

次はいよいよ、広域において多くの学校での実践に入る。この教育を一緒に進めていたたく学校教員の組織もできた。本

当に子どもたちを守る教育が間もなく全開となる。本センターの詳しい情報は、ホームページをご覧ください。ご覧いただきたい。（やまさき・かつゆき）